
妖怪にも恋愛感情はある

ゆうた

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

妖怪にも恋愛感情はある

【Nコード】

N9863Y

【作者名】

ゆった

【あらすじ】

吸血鬼の男の子と普通の女の子が織り成すバカな小説です

モノローグ

「おはようございます 式羽にわ智美ともみといいます 今月この学校に転校してきた者です 宜しくお願い致します」

そう言うと私は頭を下げた

お父さんの仕事の関係でこの学校に転校してきた 転勤だったかな？
そう言っただけで本当は島流しなのだ

島まで流されたわけではないけど

ま〜ド田舎だ ウン

「ん、式羽は左から2番目の一番後ろの席に座ってくれ
これからHRホームルーム始めるぞ〜」

前の席の人は銀髪 赤眼の男の人だった

(不良かな?)

「あの……おはよう?」

「ああ おはよう」

にっこりとおはようと返してくる

「部活は?」

「テニス」(幽霊部員でしょ)

「趣味は?」

「夜遊び」(やっぱなあ)

「性格は?」

「おとなしい」(嘘付けっ)

「好きな食べ物は?」

「ん……肉かな? 特にレア」

これらのことが今日聞き込みをした結果だ ウン悪くない

この人はあまり悪そうな人ではなかった 先生に「なんで銀髪なんですか?許してもいいんですか?」

と聞くと「あの子のは地毛だよ それにあの眼もカラコンではない

らしい」

すごい人も居るもんだ

私は前の学校でもテニス部に入っていたので一応テニス部に入部
偶然？奇遇？

部活の時間になるとまず例の子に話しかけた　そういえば名前聞いて
いなかったな

「こんにちはっ！　お名前は？」

「……俊咲輝也しゅんさくしゅいか」

「輝也君だね覚えとこ」

「苗字で呼べ」

「えー　名前のほうがいいと思うよ？」

「それとー俺に付き纏うな　痛い目にあうぞ」

「えーなんで？」

そういうとさつきからクスクス笑っている女の子グループを指差した
指差されたグループは一気にシーンとなって四散した

私はその中の一人を捕まえて簡易事情聴取を執ることにした

モノローグ(2)

「いや 少し話を聞いてもいいかなー？」

「いえ あの その」

私は小動物系というんだろうか？ かわいらしい女の子を壁に当てて脅している

ウン はたから見たら普通に変体行為だね

「まずは……なぜ笑っていたの？」

「いやあ……その……あの……グループでそうなってるんです」

「？」

「リーダーみたいな人がそう言うのと逆らえないんです」

「中心人物は？」

「い………言えません！」

「ふうん？」

「ひっ!？」

私はその子を連れて（手首を後ろで縛って）私が思い当たる女の子のところへ連れて行った

「やつ 甲さんこうざん」

「ああ 弐羽ふたばさんか 部活は？」

「サボってますひとつ質問していいですか？」

「なに？」

縛られている女の子はじつとしている

「この子の仲良くしているグループのリーダー的な人って知ってる？」

この人は学級委員でクラスのこととはよく観察していると先生が言っていた

「うーん 御木本みきもとさんかしら？」

「っ!」

核心を突いたようだ

（1時間後）

「あら？ 式羽さんじゃない なんで樽谷さんの手縛ってるの？」

「あなたに話があつてきました」

私は手枷を取つて離れた すると一目散に逃げた

「なにかしら？」

「輝也君のことです なんであなたの仲良ししているグループで避けてるんですか？」

「そこまではれちゃってるの……」

「答えてください」

「フられたからよ」

「……それだけ……ですか」

「そうよ」

「あなたが？」

「そうよ」

「好きだったんですか」

「そうよ」

「今は？」

「関係ないわ」

「そうですか」

「それで？あなたが言いたいことはこれだけじゃないはずよ」
「……」

この人も私のことをよんでいるみたいだった

「言いなさいよ」

「輝也君を阻害するのはやめてください」

「イヤよ」

「え？」

「イヤよ絶対イヤ」

「なんでです？」

「私をフったから」

「……それじゃああなただけ阻害すればいいじゃないですか
あなたのおかげで輝也君が肩身の狭い思いしてるんですよ！？
あなたの影響力を考えたことありますか？

学校全体が一人を阻害したらどうなるか分かりますか！？」
私はいつの間にか怒鳴ってしまった

前の学校では人前できつぱり言いすぎていじめられていた過去がある
どこかフラッシュバックしてしまったのだろう……

「あなたの言いたいことは……わかった」

そう言っただけでなく反省した顔でどこかに消えた

部活終了の音楽がながれている 10月のことだった

10月4日

「おはよお」

「おはようございます」

学校での輝也君への阻害がなくなった2日後

1日1回じゃすまないほど告白されているらしい すごい……

しかもその一人目が弔さんで阻害が始まったとい経緯だ

「おはよっ」

「んーおはよー」

私とはみんなとは違う挨拶方法なのだ 理由は簡単 私が助けたからである

「その 言いくいけどありがとな？ お前がいなきや自殺してた

かもしれない」

「いいっていいって その代わりちゃんと周りの人と目を合わせて会話すること」

「うん お安い御用さ」

ガラガラッ

「おはよう みんな席に着け」

ガヤガヤ

ホムルーム

「HR始めるぞお」

来て初日に思ったのだがとんでもなくゆるい先生だ 年齢は……20台だな絶対

朝のHRが終わった次の授業は美術

私の好きな科目なのだ

「なあ あの 教えて？その……美術」

「へ？」

「もうすぐ期末じゃん」(一ヶ月あるよ……)

「うん？ まあいいけど？」

「ありがとう！」
うわあ聞いていた周りの女生徒の視線が痛い 私は逃げ出すように美術棟に向かった

《一時限目 美術》

「きりーっ きおつけーれー」

「おねがいしまー」

ガタガタと音を立てて座った
全くゆるい中学校だ

「はい それでは勉強を始めていきたいと思います

まず 美術資料P39を」

私は熱心に聴きながら輝也君に教えていた

「それじゃあ ここを 式羽さん」

「は！？ はい！？」

あははと声があがる 声が裏返りまくってしまった

「……私語を慎みなさい 美術資料P39 『最後の審判』の作者」

「ミケランジェロ」

「ご名答 どここの協会に作られたかを 栗山君」

「バチカン市国」

こんな感じに授業は進んでいった

《帰宅前のHR》
ホームルーム

「はいHR始めるよ」

前で輝也君が死んだ顔をしていた勉強は終わった
もう私が教えたことは完全に覚えたみたいだった
授業そっちのけでやってたからなあ

「はいそれでは解散 起立 きをつけ 礼」

「ありが」

授業のときより早い！？

「部活いこっか」

「うん」

《部活》

私は実質 部活は1日しか出ていない

顧問は氷羅先生 女だ

「はいはい（手をパンパン）まずは組でラリー」

「はい」

私の相方は和田さん 和田さんが後衛で私が前衛
少しソフトテニスのことを触れないといけない
ソフトテニスとは基本ダブルスで行う

基本的にこのようなポジションをとる

- ・ 2人とも後ろの『ダブル後衛』
- ・ 2人とも前の『ダブル前衛』 これは基本中学校ではない
- ・ 1人前 1人後ろの『基本ポジション』 名前はなし

殆どの組は最後の『基本ポジション』だ

ネット前につくのが前衛 後ろのサーブラインでボールを打つのが後衛

前衛は前でスマッシュ・ボレーでトドメをさす役目
後衛は後ろでチャンスを前衛に作る役目
になる

私は1：1のラリーではサーブラインより1歩後ろで打ち返して
相手も同じように打ち返す

そうして ラリー 前衛練習 後衛練習 サービス 生理運動
コート整備 解散

《帰宅後 家》

疲れた

「ただいま」

「おかえり」

母さんが家にいた

かえってすぐ風呂に入ってご飯

あしたの準備と宿題しなきゃ

時間割を見る 筆箱を開き中身を見る シャープペンシルを出して

カチカチッ

「アッ あーシャーペンの芯買うの忘れてた

かーさーさん」

「なに？」

「105円也」

「文房具？」

「シャーペンの芯」

「ん」

私は夜8時に家を出た 女の子だけど変わらない……よね？

そこで私は“本当”の輝也君を見ることになったんだ……

10月4日(2)

ガシャリンと自転車をストッパーの拘束から解き放つ
シヤアと走り漕ぐ

「うろうう 寒い！」

100均一(105円均一)に到着

ちやんとあるんだな 100円均一

この閉店時間は……10:30!ダイジョブだ

文房具の棚からシャーペンの芯を取って買った

帰ろうと自転車に乗ろうとしたその時

「？」

私は街頭の上に人が座っているのを見るのが初めてだった田舎人は
みんなするのかな？

いや無理だろう

「だれ？」

「……俊咲 輝也」

「うそ……」

見た目は全然違った短かった銀髪は長くロングヘアに

眼はもともと赤かったのに真ん中に切れ込みの黒い線が入っている

「本当だ 貴様は？」

口調も違う

「私は弐羽智美」

「ふむ 昼のクラスメイトか」

……感じが違う

「あなたは本当に輝也君？」

「そうだ どこか違うとも思ったか？」

「性格 見た目」

「ふむ いいところを突いてくるそうだ俺は夜と昼とで人格が違う」

「え？」

「吸血鬼ヴァンパイアは日光を浴びると弱くなると知らないか？」

「吸血鬼ヴァンパイア……！」

「そう吸血鬼ヴァンパイアだ 朝の7:00〜夜の7:00まで昼の人格
夜の7:00〜朝の7:00までは俺の時間だ

そして人格が変わると同時に風貌も変わる」

「信じられない！」

私は自転車に飛び乗って逃げた

輝也はフウと息をついた

10月4日(2)(後書き)

ここは必ず加筆します

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9863y/>

妖怪にも恋愛感情はある

2011年11月30日00時49分発行